

11. 中国の軍事力に関する米国防総省報告書



2020年9月1日、米国防総省の議会への年次報告書「中華人民共和国に関わる軍事および安全保障上の展開2020—議会への年次報告」が公表された。中国政府は同報告書は冷戦思考に満ちており、「中国の軍事的脅威」を誇張していると評している。報告書は中国の核弾頭数を現在200強と低く見積もっているが、は今後10年間で2倍強になると予測している。以下では中国の核抑止政策に関する部分を抜粋する。

❖ 中華人民共和国に関わる軍事および安全保障上の展開 2020—議会への年次報告(抜粋) ❖

2020年9月1日

核抑止

主な重要項目

- ・ 中華人民共和国の戦略的野望、安全保障環境に対して変化する見解、生き残り可能性に対する懸念が、同国の核戦力の規模、能力および即応性に重大な変化をもたらしている。
- ・ 中国の核兵器政策は、敵国の第一撃に報復できる生き残り可能な核戦力の維持を最優先している。
- ・ 中国は長年「核先行不使用」(ノー・ファースト・ユース)政策を維持している。ただ、中国が先行不使用政策の外で行動する条件については曖昧である。
- ・ 中国の核戦力は今後10年間で大きく発展するであろう。なぜなら中国は陸上、海洋、空中配備の運搬手段を近代化させ、多様化させ、数を増加させているからである。
- ・ 中国の備蓄弾頭は現在のところ200強と見積もられるが、今後10年間で少なくとも2倍の規模となると予想される。中国は核戦力を拡大し、近代化しているからである。
- ・ 中国は核能力のある空中発射弾道ミサイル(ALBM)の開発によって「核の三本柱」を追求し、地上および海洋配備の核戦力も改良している。
- ・ さらに2019年における新たな展開は、拡張されたサイロ配備戦力によって警報即発射(LOW)態勢に移行することによって、中国が核戦力の平時における即応性を強化しようとしていることを示唆している。

中国の核兵器政策は、第一撃から生き残り、敵国に受け入れがたい被害を与えるのに十分な戦力でもって反撃できる核戦力の維持を最優先にしている。これらの核戦力がその即応性を確実にするために中国は平時即応性のレベルを強化している。加えて、米国の、そして程度は小さいがロシアの戦略的ISR(情報、監視、偵察)、精密攻撃、ミサイル防衛能力の継続的な発展に直面して、中国は多弾頭化とペネイド(ミサイル防衛を突破する補助装置)によって構成

される弾頭をもった新世代の移動式ミサイルが自国の戦略核兵器の生存可能性を確実にすることを意図していると主張する。インドもまた中国の核脅威認識に影響を与える要素となっている。

(略) 中国の核戦力の能力、性能、即応能力に関する今後数年間に予想される変化のペースは、第一撃に対する中国の報復能力を脅かすであろういかなる敵による潜在的な発展のペースをも上回る可能性が高いと思われる。こうした事情と中国の透明性の欠如は、何が最小限の抑止力を構成するのかという要件を中国が変えているのではないかという懸念だけでなく、長年続けてきた最小限の戦力態勢を放棄したかもしれないという懸念を引き起こしている。

核の先行不使用政策

中国は長年にわたり先行不使用政策を維持しており、中国に対する核攻撃に報復する場合に限り核兵器を使用すると表明している。中国の先行不使用の誓約は、2つの表明された誓約で構成されている。すなわち、中国は、いかなる時、いかなる状況においても、決して最初に核兵器を使用しないという誓約と、いかなる非核兵器国に対しても、または、非核兵器地帯においては、中国は無条件で核兵器の使用、または使用の威嚇を行わないという誓約である。(略)

陸上配備プラットフォーム

中国の核兵器は現在、サイロ配備のCSS-4 Mod 2 (DF-5A) と Mod 3 (DF-5B)、固体燃料で道路移動式のCSS-10クラス (DF-31、DF-31AおよびDF-31AG)、そして、ロールアウト方式のより短射程のCSS-3 (DF-4) を含む、約100発の大陸間弾道ミサイル (ICBM) で構成されている。この戦略兵器は、道路移動式で固体燃料のCSS-5 Mod2およびMod6 (DF-21) 準中距離弾道ミサイル (MRBM) とDF-26中距離弾道ミサイル (IRBM) によって補完される。これらの中距離、準中距離ミサイルはインド太平洋地域のターゲットに狙いを定めることができる。(略)

海洋配備プラットフォーム

中国は、6隻の晋クラスの弾道ミサイル搭載原子力潜水艦 (SSBN) を建造した。そのうち4隻は作戦行動可能で、2隻は葫蘆島造船所で艤装中である。最大12基のCSS-N-14 (巨浪-2) 海洋発射弾道ミサイル (SLBM) を搭載できる中国の晋SSBNは同国で最初の作戦行動可能な海洋配備の核抑止力である。伝えられるところによると、中国の次世代096型SSBNは、今後製造されるSLBMで武装し、2020年代初頭に建造が開始されるようである。中国の第1世代攻撃型原子力潜水艦 (SSN) の40年以上の耐用年数に鑑みて、中国は晋と096型SSBNの艦隊を同時に運用するだろう。巨浪-2の現在の射程距離の限界により、中国が米国の東海岸を標的にしようとする場合、晋クラスSSBNはハワイの北と東

の海域まで移動して作戦を実施する必要がある。中国が巨浪-3のような、より新しく、より能力があり、より長距離のSLBMを配備するにつれて、人民解放軍海軍は中国の沿岸海域から米国を標的にする能力を獲得するだろう。

空中配備プラットフォーム

人民解放軍空軍は、2019年10月の70周年記念パレードで、H-6Nを長距離戦略爆撃機として公開した。従来のH-6爆撃機からの最も重要なH-6Nの改善点は、空中給油用プロブの追加、および核兵器搭載能力があると考えられている空中発射弾道ミサイル（ALBM）の外部搭載を可能にする凹型の機体への改造である。（略）

出典：米国防総省HP
<https://media.defense.gov/2020/Sep/01/2002488689/-1/-1/1/2020-DOD-CHINA-MILITARY-POWER-REPORT-FINAL.PDF>
アクセス日：2021年3月27日